SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.07
2018.04

「拓け！野球の未来 子どもの未来」
Baseball Surfer 古木克明氏

Take Free

「拓け！野球の未来 子どもの未来」
Baseball Surfer 古木克明氏

インタビュアー・片山清宏 / 文・片山久美

とある日の湘南ビジョン研究所ソーシャルマガジン編集会議。
「今回のインタビューは古木克明さんにお願いしました」との担当者の発言に、メンバーからどよめきと黄色い声が上がった。
「あの古木選手・・・！？」
そう、「松坂世代No.1スラッガー」、「横浜ベイスターズドラフト1位」、「総合格闘家」という輝かしい経歴を持つ元プロ野球選手。

古木克明。

その生き様からいまだ熱狂的ファンも多い彼の素顔は、意外なくらい気さくで、そして純粋だった。鵠沼海岸の風を気持ちよさそうに受けながら自然体で語る古木の半生を追った。

いじめられっ子少年の「夢」

1980年、三重県松阪市生まれ。小さい頃から体の大きかった古木は、意外にも小学校時代いじめられたことがあるという。
「小さい地域で、周りに同級生がいなかったせいか、遊び相手はいつも年上のお兄ちゃんたちでした。普段は優しいんですけど、学校に行くといじめられて。家でたまった鬱憤を晴らされていたんですかね（笑）」
少年時代の古木は、やんちゃで泣き虫。いたずらっ子で先生からしょっちゅう怒られていた。野球との出会いは物心がついた頃。気づけば近所の公園で年上の子どもたちと当たり前のように楽しんでいた。
本格的な野球体験は、小学校3年生で硬式野球のボーイズリーグに入ってから。古木の才能はすぐさま開花し、1年後にリトルリーグへ。その頃、テレビで見たあるプロ野

球選手が放った日本シリーズでの場外ホームランに魅せられ、「将来はプロ野球選手になりたい」と夢を持った。

スポーツ少年団のソフトボールでも活躍し、古木が後に「原体験」として語る、野球が本当に楽しいのびのびとした時代だった。

しかし、小学校４年生の頃から、楽しいだけの野球にいろいろな思いが重なり始めた。

「新しい監督になってから、『リトルリーグかソフトボールか、どちらか一つ選べ。そうしないと試合に出させないぞ!』と迫られたんですよ。自分にとってはどちらも大切なんで、どうして一方を捨てなければいけないのか分かりませんでした。監督からは練習中に罵声を浴びせられたこともあって、子ども心に理不尽さを感じ、野球を辞めようと思ったこともありましたね。結局、ソフトボールは諦めてリトルリーグを選びました」

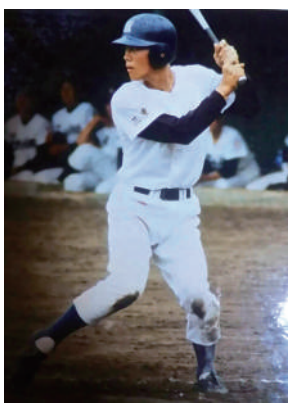
能力、パワーともに他を圧倒する古木の才能は誰もが認めるところだった。監督としては古木の将来性を見込んであえて厳しい指導をしていたのかもしれない。

しかし、小学生の古木には「ただ野球を楽しくやりたい」という気持ちの方が強かった。「才能がある故の苦悩」。古木に対する周りからの期待に、古木本人の心が追いついていけなかった小学校時代だった。

甲子園出場、スター街道へ

その後、古木は中学時代のシニアリーグを経て、愛知県豊田市にある豊田大谷高校へ入学。

「入部当初は特に目立っていたというわけでもなく、高1の夏くらいかな、徐々にホームランが出だして、スタメンに選ばれるようになって。高2のとき甲子園で2打席連続ホームランを打ったときは本当に嬉しかったですね」



2打席連続本塁打。そのインパクトは強烈で当時の雑誌には「怪物」の二文字が躍っていた。「怪物」と呼ばれたのは松坂大輔よりも先だったのだ。その後、高校日本代表にも選出。全国デビューを果たした古木の人気はうなぎ上りとなった。

「高校は共学でしたが練習一筋で、あまり女子と話す機会もありませんでした。でも、甲子園に出た後からファンレターをたくさんもらいましたね。『もっとモテたい』という気持ちが原動力で練習をがんばってました（笑）。

出展：週刊ベースボールONLINE

妹がファンレターに同封されているプリクラを見てファンに電話をかけちゃったなんてこともありました（笑）」

古木は、ただひたすらに『もっと活躍したい』『もっと上を目指したい』という思いで練習に打ち込んだ。

しかし、ここで人生初の「スランプ」に陥った。

「高2の夏までは成績が上がり続けていたんですが、夏以降は打てないときも増えて。高2から高3に上がる頃が一番きつかったですね。生まれて初めてスランプを経験して、このままだとプロ野球から声がかからないんじゃないかと毎日焦っていました」

そんな不安を抱きながら迎えた高3の夏。古木は見事、チームを甲子園ベスト4に導いた。試合終了後、古木が球場の土を掴み、悔しそうに握りしめて尻ポケットに入れる姿がテレビで大きく放映され、野球少年たちの憧れの的となったのもこの頃である。

ドラフト１位、夢のプロ野球選手へ

高校通算52本塁打という輝かしい成績を残し、1998年、横浜ベイスターズ（現、横浜DeNAベイスターズ）にドラフト１位指名を受けて入団。

1999年から2001年は一軍の出場は少なかったが、2002年には二軍でチームトップの打率.285、13本塁打を打ち、シーズン後半から一軍で積極的に起用された。2003年には自己最高の22本塁打を記録。スラッガーとして一躍スター選手となった。

しかし、その年をピークに成績は下がり始め、他の選手の好調もあり徐々にスタメンから代打への起用となっていった。

「2002年が一番良くて、2003年は甘えの気持ちが出てしまいました。一軍に上がってまだ１年目、来年活躍すればいいというぐらいの心構えでした。同級生の松坂大輔が良い目標になっていたはずなのに、大事なチャンスを掴めなかったんです。試合に出場させてもらえる機会が減っていくことが何よりも辛かったですね」

プロ野球選手は１試合１試合が真剣勝負。成績は全て自分とチームに跳ね返ってくる。古木は当時を振り返り、「弱い自分が出ていた時代」と語る。

「当時は自分に自信が持てず、軽いノイローゼのようになっていました。いろんな人のアドバイスを聞き過ぎて混乱してしまったり、成績に対するプレッシャーから逃げたくて弱音を吐いたり。その頃、牛島監督は表情が暗かった私を心配して『いつも笑顔で』と声をかけてくれていました。今思うと本当にありがたかったですね。不調の原因を球団やコーチのせいにして、『自分の弱さ』と向き合うことができない自分がいました」

2007年、オリックス・バファローズへ移籍。「全てをリセットしたい」との思いもあった。シーズンが始まる前から、「このシーズンがラストになったとしても後悔しないよう、どんなときも自分の信念に基づいて一日一日を終えよう」と心に決めていた。

二軍では打率.310と好成績を残した。しかし、なかなか一軍への出場機会をもらえない。2009年10月、突然「戦力外通告」を突きつけられた。

「『なぜ』と思う反面、正直、『やっとこれでプレッシャーから解放される』というホッとした気持ちもありました」

翌月に2回、球団合同トライアウトに参加したが獲得球団はなく、あえなく現役を引退。

総合格闘家へ転身、「死の恐怖」も

しかし、ここで古木は驚きの展開を見せる。なんと現役引退の余韻も冷めやらぬ翌月の12月、総合格闘技の新団体「スマッシュ」への入団を発表したのである。

出典：BOUT REVIEW

「アメリカの独立リーグにチャレンジしたらと勧めてくれる人もいましたが、当時の私は無収入でそれは現実的ではないと思っていました。そんなとき、昔お世話になっていた方に誘われて。当時、総合格闘技は華やかな世界でしたし、新しいチャレンジで成功して、見返したいという気持ちもありました」

格闘家としての日々の練習。初試合は、2010年大晦日「Dynamite!～勇気のチカラ2010～」でのアンディ・オロゴンとの対戦だった。結果は、3-0の判定負け。

当時を振り返って古木は語る。

「試合は直前に決まり86kgある体重を一気に76.5kgまで落としました。急激な減量でフラフラになって練習で力が入らず、唇も黄色くなるほどでした。何より試合で戦うことがメチャメチャ怖かったんです。『死ぬかもしれない恐怖』。正直、試合前は、会場の『さいたまスーパーアリーナ』を誰かが消して、試合がなくなってくれればいいのにと思っていました（笑）」

古木は、日々、格闘家として鍛錬する一方で、野球に対して現役時代とは全く違った思いを持つようになっていった。

「プロの時に培った持久力系の筋力は全く通用しませんでした。格闘技って本当にきつい。練習からすでに痛いし（笑）。格闘技に比べれば、『野球ってなんて良いスポーツなんだろう』と、隣の芝が青く見えてきたんです。試合での『死の恐怖』を乗り越え、現役時代の自分や野球の課題も見えてきて。今、野球をやったら、もっといろんなことができるんじゃないかと考えるようになってきました」

プロ野球の恵まれた環境。監督やコーチ、スタッフに支えられ、切磋琢磨できる最高に熱い仲間たちがいつも周りにいた。現役時代に気づくことができなかったこれらのことに、古木は、ようやく気づくことができた。

そして2011年4月、格闘技転向後の初勝利を飾ったのちに引退。再び、球界復帰を目指し野球の練習を開始した。

球界復帰めざすも、苦悩の日々

その後の2年間は古木にとって「人生のうちもっとも苦しい時代」だった。

2012年11月には12球団合同トライアウトに参加。しかし、格闘技に転向したという経歴もマイナスとなり獲得球団は現れなかった。

「自分を欲しがってくれた球団もあって、正直いけると思っていました。でも最終的にはダメでした。すごく期待していただけに本当にショックで、アクアラインを車で走っていたとき、このまま海に飛び込んだ方が楽だと思ったこともありました」

そのとき古木を支えたのは、ファンや周りの人々の励ましだった。
「当時、Twitterのフォロワー数が１万人を超えていて、多くのファンが自分を応援してくれていました。自分の境遇を重ねて励ましてくれる人もいて。辛く苦しいこの時期を経験して、１日でも長くプロ野球のユニホームを着ていることがいかに素晴らしいことだったのか、ということに気づくことができたんです」

そして2013年、ハワイの独立リーグ「パシフィック・アソシエーション」のハワイ・スターズに入団。好成績を残すも球団が解散したため1年で退団。シーズン終了とともに現役を引退することとなった。

大学院で見つめ直した人生

野球という素晴らしい才能に恵まれ、それを最大限に活かすことで活躍してきた古木。しかし、34歳という若さで野球を引退し、新たな道を模索するうち、自分の持つ野球以外の才能を見つける必要性を感じた。

「格闘技を辞めた後も、会社に入ってサラリーマンになろうという発想はありませんでした。組織の中で誰かの下で働くというよりも、自分で事業を立ち上げた方がうまくいくんじゃないかと。いったんスポーツから離れて一から学び直したいと思い、事業構想大学院大学に入学したんです」
アスリートのセカンドキャリアについて研究し、事業構想修士（MDP）を取得、2016年、同大学院を修了。その後も、元プロ野球選手として初めて、車いすソフトボールの大会に出場するなど、様々な活動を行った。

事業家としての再挑戦

2017年、古木は、「野球をもっと楽しく、もっと格好良く」をコンセプトに、個人事業として「The Baseball Surfer」を立ち上げた。野球を指導するスクール事業と、オリジナルのアパレルブランド事業を展開している。

なぜ、「Baseball Surfer」なのか。
「ハワイのチームにいたとき、仲良くなったメジャーリーガーが親しみを込めて自分のことを『Baseball　Surfer』と呼んでくれていたんです。大好きなサーフィンができるこの湘南で、『野球×サーフィン』のように、型にはまらない自由な発想で、野球をもっと楽しく、もっと格好良くしていきたい。そんな思いを込めました」

古木は、「子どもからお金

を取らない」をポリシーにしている。子どもに野球を教えることで稼ぐのではなく、古木と野球を楽しんだ大人たちに「The Baseball Surfer」のロゴ入りTシャツを買ってもらうことで収益を得る。これが古木の考え出したビジネスモデルである。

Tシャツは一枚一枚彼の手作り。Tシャツが売れた分だけ野球を楽しんでいる人たちがいる。古木は「野球を楽しんでいる人」の「見える化」にも挑戦している。

「小学生の頃、野球嫌いになった時期がありました。でも、野球は本当に楽しいし好き。今の自分があるのは野球のおかげなんです。その野球に恩返しをするためにも、誰もが野球を『当たり前』に楽しめる世の中を作りたい。やる楽しみ、見る楽しみ、支える楽しみ。どこのポジションでもいいから、たくさんの人の中に野球のポジションがあったらいいと思っています」

インタビューの最後に、プロ野球選手、総合格闘家、大学院生、そして事業家と、様々な経験をしてきた古木からメッセージをもらった。「やりたいことが見つからない、やりたいことがあるけど一歩が踏み出せない人」へ。

「『The Baseball Surfer』が生まれたきっかけは、今まで辿ってきたいろんな道をいったん全て見直すという作業をしたからです。大学院では『バックキャスティング』と呼んでいましたが、自分の人生を振り返って１つずつ見直していくと、本当にやりたかったことが浮かび上がってくるんです。だから、子どもたちにはいつも『今持っている夢はちゃんと忘れずに持っているんだよ』と伝えています。本当にやりたいことって意外に小学生のときにやりたかったことだったりするんですよね」

世の中の「当たり前」を作っていく。その最高にカッコ良い挑戦に挑む古木は、やっぱり最高にカッコ良い。

湘南VISION大学

海をもっと楽しもう！

いよいよ始まる！
5月5日(土) 開校!

NPO法人湘南ビジョン研究所では、湘南の海に想いのある人が集まり「海の学び場」をつくろうと、2016年7月に「湘南ソーシャル系大学設立プロジェクト」をスタートさせ、開講に向けて準備を進めてきました。

いよいよ2018年5月5日（土）、「海」に特化した市民大学「湘南VISION大学」として開校します。

「海をもっと楽しもう！」をテーマに、海に触れる体験、フィールドワーク、ワークショップなどの授業を通して、湘南の海の環境や歴史はもちろん、海の楽しみ方を学びます！

記念すべき開校式の会場は、2020年東京オリンピック・セーリング競技が開催される江の島！この湘南でたくさんの仲間をつくって海を思いっきり満喫したい方、ご参加をお待ちしています！

ミッション

「湘南の海を守り、未来をつくる人」をつくる

特徴

① 海を知り、体験できる学び場

教室は湘南の海。海を体感・体験してもらう魅力的なアクティビティ、ワークショップを用意。海を知って、思いっきり楽しめる大学です！

② 海を専門とする多彩な講師陣

講師は海を専門とするアスリート、社会起業家、経営者ほか、一流の研究者。自分が先生になることもできる、みんなでつくる大学です！

③ 海ゼミの仲間と交流、実践

授業には海を楽しむ仲間がたくさん参加。受講後に海ゼミをつくって交流を続けるのもOK。一人ひとりの「イキイキ」を応援する大学です！

湘南VISION大学 2018年度 受講生大募集！

2018年度の授業の詳細は決まり次第、NPO法人湘南ビジョン研究所のHP、FB等でお知らせします。授業は単発開催ですので各回個別でお申し込みください。2018年度カリキュラムは順次追加しています。

授業企画案・先生も募集！

「湘南VISION大学」は、これから、みんなでつくり上げていきたいと思っています。授業企画、先生は随時募集中！スタッフとして運営をお手伝いいただける方も「お問い合わせ先」にご連絡ください。

お申し込み／お問い合わせ

NPO法人 湘南ビジョン研究所
HP：http://shonan-vision.org/
FB：https://www.facebook.com/shonanvision/
e-mail：info@shonan-vision.org

SHONAN VISION
Social Magazine
Vol.07
2018.04

PUBLISHER：片山清宏
EDITOR IN CHIEF：森休八郎
ART DIRECTOR：大戸千尋
EDITORIAL STAFF：片山久美
COVER PHOTO：芹川明義

web http://shonan-vision.org/
@shonanvision
info@shonan-vision.org

SHONAN VISION vol.07 | 2018年4月号 2018年4月25日発行 発行：NPO法人湘南ビジョン研究所 〒251-0027神奈川県藤沢市鵠沼桜が岡3-9-29 shonan-vision.org